



Title	後期西田幾多郎の宗教論における自己と絶対者の関係 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	侯, 乃禎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15980号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92255
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Naizhen_Hou_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 侯 乃禎

主査 教授 田口 茂
審査委員 副査 教授 藏田伸雄
副査 准教授 今村信隆

学位論文題名

後期西田幾多郎の宗教論における自己と絶対者の関係

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、西田幾多郎が最晩年に展開した宗教論の中心概念である「逆対応」の概念をめぐって、西田の宗教論の核心にある自己と絶対者との独特の関係のあり方を考察したものである。初期の著作である『善の研究』から最晩年の論考「場所的論理と宗教的世界観」までの宗教論の展開を視野に収めつつ、「逆対応」概念の解釈に関連する問題系を取り上げ、多角的に考察を展開している点に特徴がある。本論文の学術的成果としては、主に以下の点が挙げられる。

第一に、「逆対応」概念が出現する西田幾多郎のテキスト、ならびに同概念の解釈を展開している二次文献を網羅的に取り上げて検討している点が挙げられる。「逆対応」の概念は、西田哲学研究においてこれまでもしばしば取り上げられてきたが、同概念の研究史を網羅的に取り上げて提示した研究はこれまで存在しなかった。本論文は、従来の「逆対応」解釈においてとりわけ二つの方向性が主導的であったと指摘している。第一に、自己と絶対者との相互関係を強調する解釈、第二に、自己に対する絶対者の先行性を強調する解釈である。どちらも重要な側面を取り出しているが、前者では自己と絶対者の関係が対称的になりかねないという問題があり、後者には自己が絶対者の自己運動に吸収される汎神論的一元論に陥る危険があると本論文は指摘している。これに対し本論文は、「我々は個となればなる程、神に近づくのである」といった西田の言明をとりわけ重視し、絶対者の先行性と隔絶性を最大限重視しつつも、われわれが矛盾的な自己のあり方を徹底して掘り下げるなかで、逆転的に超越的な絶対者に会おうという構造を強調している。こうした「逆対応」解釈は、更なる展開や批判的吟味の可能性を含むとしても、その議論の包括性と一貫性において、今後の西田哲学研究が参照すべき重要な研究となり得ている。

第二に、西田の宗教論（とりわけ「逆対応」の概念）の前提を成している西田哲学の根本的な諸問題、すなわち「対象論理」と「場所的論理」の意味、「自力」と「他力」の概念、宗教と道徳性の関係、そして「個物」としてのわれわれのあり方などについて、一つの統一的な解釈を示している点が挙げられる。西田の難解な言明を単に決まり文句として繰り返すのではなく、他分野の研究者でも理解しうるレベルまで噛み砕いて解釈し、平易な表現にもたらしめている点は、たとえ当該テーマに関する西田の思索のすべてを反映するものではないとしても、当該の問題に関する今後の研究に重要な寄与を果たすものとして評価できる。

第三に、西田の宗教論を単に内在的にのみ研究するのではなく、滝沢克己や田辺元による西田哲学批判の参照、田辺元やキルケゴールの宗教論との比較、ライプニッツの個体概念およびその形而上学的な位置づけと西田の「個物」解釈との比較、等を通して、西田の宗教論に多様な角度から光を当てている点が挙げられる。これにより本論文は、西田の宗教論、とりわけ神と人間との関係に関する思索——その核心に「逆対応」概念がある——を解釈するに際して、多様な参照軸をもたらし、西田の視点のみを一方向的に提示することなく、より広いコンテキストのなかに西田の宗教論を位置づけている。

本論文の一部が下敷きとしている諸論考は、西田哲学の専門学会である西田哲学会の『西田哲学会年報』や、日本比較思想学会の学会誌である『比較思想研究』といった査読付き全国学会誌に採

択されている。このことは、申請者の研究水準の高さが学界においても十分に認められているというを示している。

審査委員会では、第四章での西田と田辺の共通点に関する論証が弱いのではないか、という指摘があったが、申請者は両者の明白な差異を十分に認識した上で、両者が違ったポジションから同じ究極的な事態を描き出そうとしている点を示すことを今回は優先しており、さらに踏み込んだ分析の必要性を十分に認識していることが口頭試問で明らかになった。また、「仏と自己とは相対立するものでない」「仏は包むものである」といった西田の言明に対する解釈が十分に明確でない点が指摘されたが、口頭試問では、「神は対立的方向、仏は「包む」方向として、絶対者の二つの方向を示しており、仏が絶対者なのではなく、仏は絶対者の一側面である」というよく整理された解釈が提示された。いずれも、問題となっている事柄に対する申請者の十分な理解を示しており、提示された疑問点は、本論文の学術論文としての価値を本質的に損なう問題ではないと本委員会では判断した。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。